

博 多 91

—博多遺跡群第130次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第762集

2003年

福岡市教育委員会

博 多 91

－博多遺跡群第130次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第762集



調査番号 0102
遺跡略号 HKT-130

2003年

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は個人住宅建設に伴う国庫補助事業として実施した博多遺跡群第130次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘にあたりご協力とご理解をいただいた施主の村田博秀氏をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が個人住宅建設に伴い、福岡市博多区御供所町3-17において実施した博多遺跡群第130次調査の報告書である。
- 本書に掲載した遺構の実測は長家伸、上角智希が行った。
- 本書に掲載した遺物の実測は上角が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は上角が行った。
- 本書に掲載した写真は長家、上角が撮影した。
- 本書にかかわる遺物および記録類の整理は久家春美、篠原明美、黒柳恵美、鈴木美保子が行った。
- 本書の執筆・編集は上角が行った。
- 本書で用いる方位は磁北である。
- 遺構の呼称は井戸をS E、溝をS D、土壌をS K、竪穴住居跡をS C、その他の遺構をS X、ピットをS Pと略号化した。
- 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 遺物の説明、分類については以下の文献を参考にした。

横出賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」

『九州歴史資料館研究論集 4』 1978年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編』 2000年

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年

山本信夫「統計上の土器—歴史時代土器の編年研究によせて—」

『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』 1990年

遺跡名	博多遺跡群第130次調査	調査番号	O 102
所在地	博多区御供所町3-17	遺跡略号	HKT-130
開発面積	50m ²	調査面積	42m ²
調査期間	平成13年4月9日～平成13年4月27日		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
第二章 遺跡の立地と環境	2
第三章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 中世の遺構と遺物	9
1) 井戸 (SK)	9
2) 溝 (SD)	16
3) 土壙 (SK)	18
4) その他の遺構	28
3. 弥生時代の遺構と遺物	31
4. その他の遺物	31
第四章 結 語	32

挿 図 目 次

第1図 博多遺跡群の位置 (1/25,000)	3
第2図 調査区の位置 (1/1,000)	4
第3図 調査区北西壁上層実測図 (1/40)	5
第4図 第1-A面 遺構配置図 (1/60)	6
第5図 第1-B面 遺構配置図 (1/60)	6
第6図 第2面 遺構配置図① (1/60)	7
第7図 第2面 遺構配置図② (1/60)	7
第8図 SEO003実測図 (1/40)	9
第9図 SEO003出土遺物実測図 (1/3)	10
第10図 SEO024実測図 (1/40)	11
第11図 SEO024出土遺物実測図① (1/3)	12
第12図 SEO024出土遺物実測図② (1/4)	13
第13図 SEO026実測図 (1/40)	14
第14図 SEO026出土遺物実測図 (1/3)	15
第15図 SDO04実測図 (1/60)	16
第16図 SDO04出土遺物実測図 (1/3)	16
第17図 SDO021および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)	17
第18図 SKO07実測図 (1/40)	18
第19図 SKO07出土遺物実測図 (1/3)	18
第20図 SKO09および出土遺物実測図 (1/40、1/3)	19
第21図 SKO10実測図 (1/40)	20
第22図 SKO10出土遺物実測図 (1/3、1/4)	20

第23図	SKO11および出土遺物実測図(1/40、1/3)	20
第24図	SKO13および出土遺物実測図(1/40、1/3)	21
第25図	SKO14および出土遺物実測図(1/40、1/3)	21
第26図	SKO16実測図(1/40)	22
第27図	SKO16出土遺物実測図(1/3)	23
第28図	SKO19および出土遺物実測図(1/40、1/3)	24
第29図	SKO20および出土遺物実測図(1/40、1/3、1/4)	24
第30図	SKO22および出土遺物実測図(1/40、1/3)	25
第31図	SKO23および出土遺物実測図(1/40、1/3)	26
第32図	SKO27および出土遺物実測図(1/40、1/3、1/4)	27
第33図	SKO28および出土遺物実測図(1/40、1/3)	27
第34図	SKO29および出土遺物実測図(1/40、1/3)	28
第35図	SXO31実測図(1/20)	28
第36図	SKO06実測図(1/40)	28
第37図	SKO06出土遺物実測図(1/3)	29
第38図	SXO15実測図(1/40)	29
第39図	SXO15出土遺物実測図(1/3)	30
第40図	SCO30および出土遺物実測図(1/40、1/3)	31
第41図	その他の出土遺物(1/3)	31

表 目 次

表1	SEO26出土上師器計測表	14
表2	SKO07出土土師器計測表	19

写 真 目 次

写真1	SEO03東壁の土層のずれ	8
写真2	SEO03出土墨書き土器	11
写真3	SDO04出土墨書き土器	17
写真4	SKO16出土墨書き土器	23
写真5	SKO22出土墨書き土器	25
写真6	SKO29出土墨書き土器	28
写真7	SXO15出土墨書き土器	29

図 版 目 次

図版1	(1) 第1面全景(北西から)	(2) 第2面全景(北西から)
図版2	(1) SXO15上層(北西から)	(2) SDO04土層(南東から)
	(3) SEO26(北西から)	
図版3	(1) SEO03(北から)	(2) SEO24(北西から)
	(3) SKO16(西から)	
図版4	出土遺物	

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成13年2月21日付けで村田博秀氏より福岡市教育委員会宛てに、博多区御供所町3-17における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号：12-2-932）。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれており、隣接地の調査において造構が密に検出されていることから本調査が必用である旨を回答した。その後、両者で協議を行い平成13年4月9日から1ヶ月の予定で発掘調査を行うことにした。

2. 調査体制

調査は以下の組織で行った。

調査委託 村田博秀

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 牛田征生

調査総括 文化財部長 柳田純季

埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第二係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

調査担当 長家伸、上角智希

発掘作業 岩本三重子、越智信孝、澄川アキヨ、中村サツエ、中村フミ子、西川シズ子、西山径子、藤野幾志、藤野トシ子、宮崎幸子、坂口剛毅（福岡大学学生）

整理作業 久家春美、黒柳恵美、篠原明美、鈴木美保子

今回の調査が一つがなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に従事していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。心から感謝いたします。

第二章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」の時期を中心として、古くは弥生時代から現在までほぼ絶えることなく人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。地理的には、博多湾岸に形成された砂丘上に立地し、西を博多川（那珂川）、東を江戸時代に開削された石堂川（御笠川）、南を石堂川開削以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって囲まれる。この砂丘は大きく3列から形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと称される。このうち、内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」と呼ばれ、南西側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と称され、砂丘Ⅱの前面に遡れて形成された砂丘で、12世紀前半からの低地の埋め立てによって陸地化が進んでいく。

今回報告する第130次調査地点は「博多浜」の中央部、砂丘Ⅱの南東部に位置し、ここから100mほど南に下ると砂丘Ⅰ・Ⅱ間の谷部がある。調査地点の位置する細い路地を東に60mほど歩くと、鎌倉時代初頭に創建された聖福寺の前の通りに出る。そのすぐ北に總門がある。

聖福寺は臨済宗妙心寺派に属し山号を安国山と号する。1195（建久6）年に崇西を開基として宋人百草跡に創建された。その建立には博多在住の宋商人である博多創首張国安らが強く関与していたとされる。山門の扁額「扶桑最初禪窟」は後鳥羽上皇の宸筆と伝えられ、禅寺の伽藍配置をよくとどめる境内は国指定史跡である。

博多遺跡群についての通史を述べると長くなるので、既刊の発掘報告書を参照していただくことにして、ここでは本調査区周辺における発掘調査の概要を紹介する。

第62次調査（『博多48』福岡市報告書第397集、1995年）

博多区御供所町224他において、1989年12月18日から1991年3月1日にかけて実施された。調査面積は2,257m²で弥生時代から14世紀前半にかけて5面の調査が行われた。縄文時代晩期の黒川式土器、朝鮮系無文土器、律令期の滑石製丸軋輪型、バスバ文字で書かれた「大元通寶」など、特筆すべき遺物が多い。今回注目したいのは中世の道路遺構である。支線道路と名付けられたこの道路は、聖福寺總門と柳田神社の北側の鳥居付近を結ぶ直線上に位置している。博多遺跡群で検出してきた道路群よりも開通時期が50年近く遅く、13世紀中頃につくられており、中世末の太閤町割りによる廃絶まで継続的に使用されている。

第71次調査（『博多53』福岡市報告書第450集、1996年）

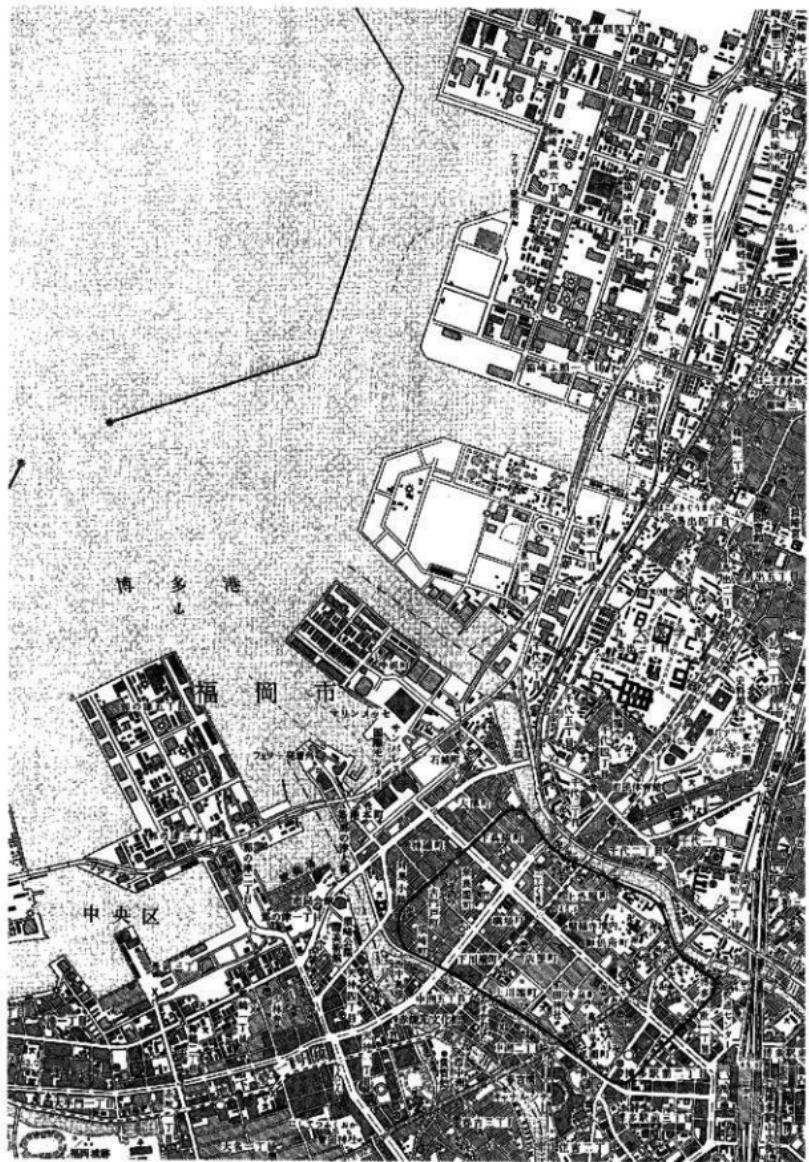
御供所町235-1他において、1991年5月15日から10月6日にかけて実施された。調査面積は600m²で、弥生時代から近世にかけての遺構が検出された。天目茶碗が150点近く出土し、ほかの輸入陶磁器類にも優品が多く見られる。博多遺跡群の中でも富裕層が居住していた地域と考えられる。

第1・8次調査（『博多60』福岡市報告書第543集、1997年）

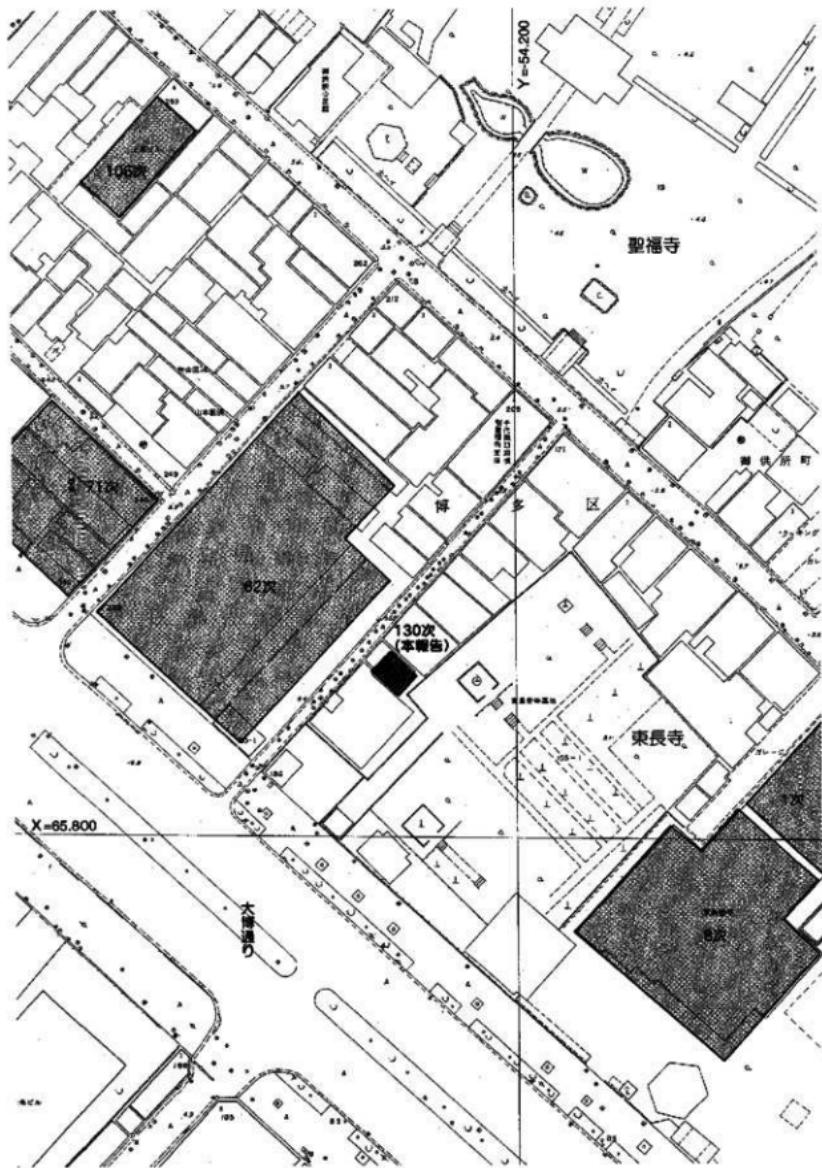
御供所町150-1において1978年11月20日から1979年1月18日（第1次）および1980年8月1日から10月28日（第8次）にかけて実施された。調査面積は476m²と600m²で、調査区は東長寺境内に位置する。弥生時代から中世にかけての遺構、遺物が発見されている。福岡市における最初の民間関係調査であり、大量の輸入陶磁器が出土した。「謝」銘の墨書き土器が注目される。

第106次調査（『博多66』福岡市報告書第593集、1999年）

御供所町5-20において、1995年2月6日から7月3日にかけて実施された。調査面積は62m²で8～14世紀の遺構が検出された。擾乱が著しく遺存状況はよくない。



第1図 博多遺跡群の位置 (1/25,000)



第2図 調査区の位置 (1/1,000)

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

1) 調査経過

博多遺跡群第130次調査地点は博多区御供所町3-17に所在し、現在の標高は約5.5mである。まず事業者側の清水建設により調査区の矢板打ちと表土のすき取り・搬出が行われ、発掘調査は2001(平成13)年4月9日から開始した。矢板で囲まれた調査区の面積は50m²と大変狭く、調査区内で排土を処理する必要から北西側の幅1.5m分を抹土置き場としたので、実際に調査できたのは42m²である。調査は後述する2面を設定し、遺構および包含層を人力で掘り下げ、第1面に3日、第2面に7日要した。埋め戻しは清水建設で行う取り決めだったので、同年4月27日の器材撤収をもって調査を終了した。

2) 基本層序

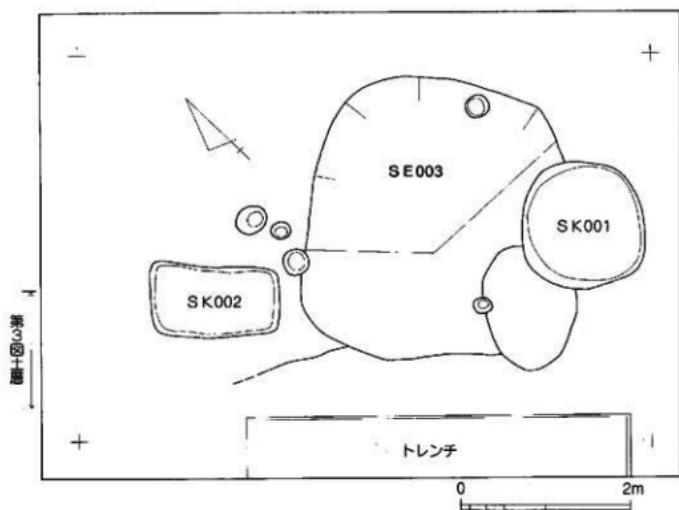
本調査区は「博多浜」を形成する2砂丘のうち海側の砂丘II、その南側に位置している。博多遺跡群は弥生時代から現代まで連続と人々が生活を営む複合遺跡であり、那珂川、御笠川の河口にあたるため概して遺物包含層が厚く堆積している。本調査区においても、基盤の淡黄色砂から地表まで実に2.3mもの堆積が見られる。第3図に調査区北西壁の土層を示す。地表下50cmまでが現代の盛土であるが、その下は擾乱もなく砂質の包含層が良好に堆積している。第5・6層上面および第8・10・11層上面に明瞭な生活面があり、表土すき取りを浅く留めていたならば中世後期から近世にかけての遺構が検出できたであろう。ただ調査期間の制約もあり、致し方のないところではある。

3) 調査概要

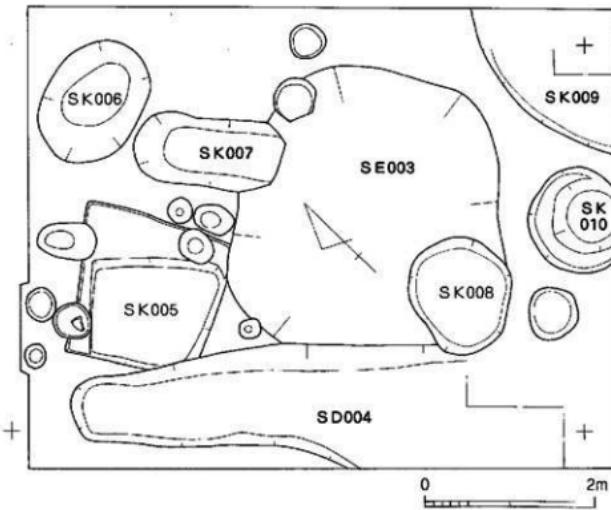
調査は2面について実施した。本来は幾重もの生活面があるはずであるが、堆積土壤の変化は少なく鍵層となる焼土層や整地層は認められなかったため、人為的に検出面を設定した。まず表土すき取り段階の高さ付近を第1面とし、その後、掘り上げた遺構の裏面やトレンチを観察した結果、途中に明確な堆積層の境がないので、基盤の淡黄色砂上を第2面として、ここまで遺構および包含層を掘り下げていった。

砂地の博多遺跡群ではよくあることであるが、遺構のプランがその属する時期の検出面では確認できないにも関わらず、下の面まで掘り下げるとき明瞭に検出できる事例がある。したがって、第1面で検出した遺構が第2面検出遺構よりも新しいかといえば、必ずしもそうではない。そのため、個々の遺構の報告は調査面ごとではなく時期ごとにまとめることにし、ここで遺構

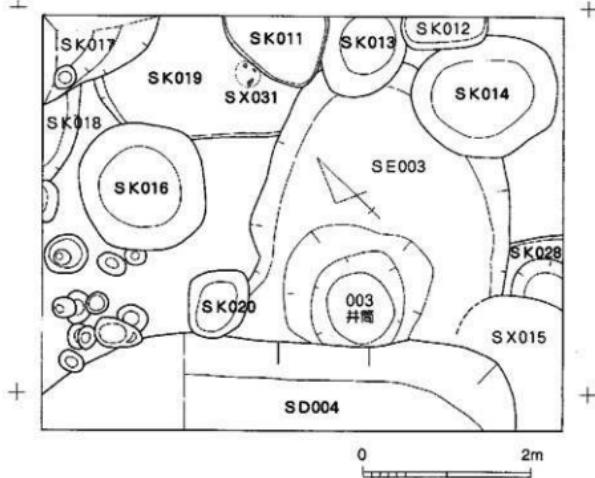




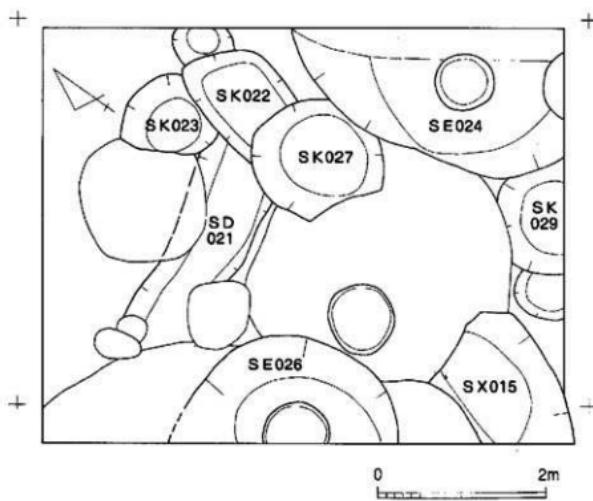
第4図 第1-A面 透構配図 (1/60)



第5図 第1-B面 透構配図 (1/60)



第6図 第2面 透構配図① (1/60)



第7図 第2面 透構配図② (1/60)

検出面ごとの調査概要を述べておくこととする。

第1面（第4、5図）

調査に着手した表土すき取り直後の高さを第1面（第1-A面）とする。標高は約3.7mを測る。遺構検出をしたが遺構のラインが概してはっきりせず、明確な遺構を精査した後、全体を約10cm下げて再度遺構検出を行った（第1-B面）。

第1面では井戸1基、溝1条、土壙7基、ピット16基を検出した。他にも遺構らしきプランがあるものの不明瞭なので、これらは第2面への掘り下げ時に確認することにした。

第1面で検出した遺構は、12世紀後半から14世紀初頭にかけてのものがあり、この面は12世紀後半ごろの生活面と考えられる。

第2面（第6、7図）

第1面の精査・記録の終了後、掘り下げた遺構壁面の土層を観察するなどして、次の調査面の設定を試みた。観察の結果、遺構密度が高く多くの遺構が切り合っていること、遺構ではなく地にあたる包含層部分がほとんどないことがわかった。したがって、すでに掘った遺構の壁面に出た土層を手がかりに大まかに遺構プランの見当をつけ、少しづつ上から下げるまで遺構検出を繰り返し、遺構の明確なプランを検出することにした。そうして検出できた遺構を順に精査する手順を繰り返して調査を進めゆき、結果的には途中で明確な生活面を認めないまま、標高約3.4mの基盤の淡黄色砂まで掘り下げるが進んだ。

この第1面から地山の間の30cmの堆積層内で検出した遺構を第2面検出遺構とする。切り合いが激しく、1枚の図面では記録できなかつたので、切り合いの新しいものを第6図、古いものを第7図に分けて記録した。

第2面では、中世の井戸2基、溝1条、土壙13基、人骨が出土した埋葬関係遺構2基、焼土層が複数面存在する焼成遺構1基、ピット19基と弥生時代の堅穴住居跡1棟を検出した。第2面検出遺構の年代は弥生時代中期と12世紀前半～13世紀である。

特記事項として、

SE003号井戸
の東側壁面の土層
(SE024埋土)
が縦方向にずれた
部分が認められた
(写真1)。地震に
ともなう地滑りで
あろうか。SE0
24より新しく、
SE003より古
い時期なので、12
世紀中頃～後半に
できたものである。

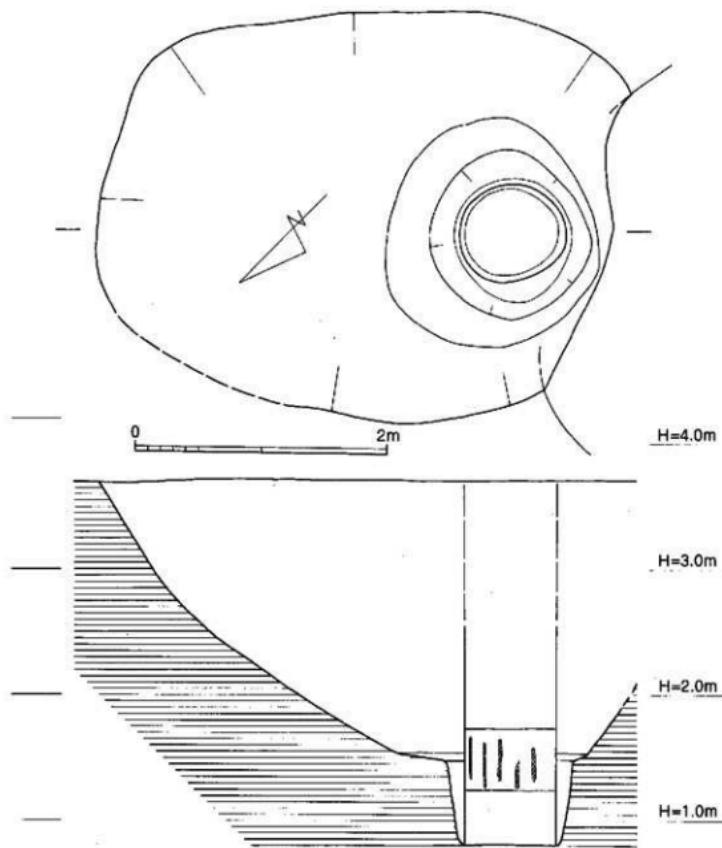


写真1 SE003東壁の土層のずれ

2. 中世の遺構と遺物

1) 井戸 (SE)

4.2mの狭い調査範囲内で3基の井戸を検出した。第1面の中央で検出したSE003、第2面で検出したSE024、026である。第2面より下で井戸掘り方の切り合いを確認でき、古いほうからSE024→003→026であった。SE024、026については、調査区境界の木矢板にかかっており、深く掘ると崩落の危険性があるため、完掘していない。



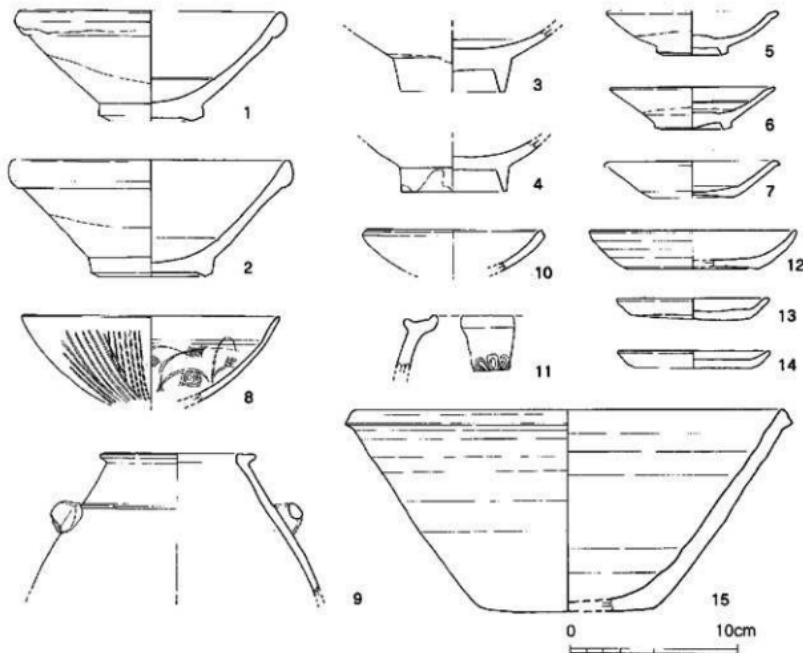
第8図 SE003実測図 (1/40)

SE003 (第8図)

第1面で検出した大きな掘り方をもつ井戸である。掘り方は径3.2~4.5mの楕円形で、井筒は西寄りにあるので東側掘り方のみ傾斜がかなり緩い。検出面から2.2mの深さで径1.5~1.8mの円形の平坦面があり、そこから更に70cm程度の深さを掘り込んで井筒を据えている(底面の標高0.8m)。底付近で木質を検出しており、井筒は径70cmの木桶と考えられる。井筒は検出面では確認できず、120cm程度掘り下げた段階でようやく検出できた。また、井筒の周囲に20cm程度の幅で褐色砂が縦方向に堆積しており、木桶を据える際、その外側にさらに円形の仕切りを作っていたようである。底面まで完掘した。

出土遺物 (第9図)

1~7は白磁である。1、2は玉縁口縁をもつ碗IV-1a類である。いずれも完形品で1は口径16.0cm、器高6.6cm、底径6.2cm、2は口径16.8cm、器高6.9cm、底径7.2cmを測る。内面見込に1条の沈線を巡らし、外面下半は露胎である。オリーブ灰色を呈する。3、4は高台が細く高い碗V類である。3は底径6.2cmで見込に1条の圓線をもつ。底部は厚く高台内は露胎で墨書を有する。花押か。5、6は皿III-1類で見込の釉を輪状に搔き取る。いずれも外面下半は露胎。5は口径10.2cm、器高2.6cm、底径4.2cmを測り、焼成が悪く釉は不透明の黄白色を呈する。6は口径9.8cm、器高2.5cm、底径4.5cmでオリーブ灰釉を施す。7は無高台の皿VI-2a類である。底面は露胎で墨書を有する。口縁部



第9図 SE003出土遺物実測図 (1/3)

は横方向に屈折し、口径10.4cm、器高2.2cm、底径4.8cmを測る。浅黄色の釉を施す。8は同安窯系青磁の碗III-1c類である。口径15.2cmで外面に櫛目文、内面にも櫛およびヘラ状の施文具で花文を描く。9~11は禮拝陶器である。9は双耳壺である。

緑灰色釉を施し、口縁端部を外に折り、その上面には胎土目の痕跡が残る。耳の付け根に1条の沈線をめぐらす。10は小皿で復元口径10.8cmを測る。11は鉢の口縁部である。やや外反し、端部はT字状を呈し内外の両端部を上方に折っている。外面に花文を型押しする。12~14は土師器である。12は壺で口径12.2cm、器高2.3cm、底径7.8cmを測る。底部は糸切りで体部はやや内湾し輪轆ナデによる棱が数条ある。13、14は小皿である。底部糸切りで見込は回転ナデ後に一定方向の指ナデを施す。14は板目压痕を有する。法量は13が口径9.0cm、器高1.4cm、底径7.3cm(完形品)、14は口径9.0cm、器高1.1cm、底径6.9cmを測る。15は瓦質のごね鉢である。口径26.4cm、器高12.0cm、底径10.4cm。口縁部は端部を外側に少しつまみ出し、体部内外面とも輪轆によるナデ調整である。胎土は粗く灰白色を呈する。以上の出土遺物より12世紀代の井戸と考えられる。

SE024 (第10図)

第2面、調査区東隅で検出した。掘り方の1/3程度が調査区内に入っている。井筒の中心からの掘り方半径は1.2~2.0mを測り、橢円形を呈するようだ。掘り方は検出面より80cmの深さまで掘った段階で危険防止のため掘下げをやめた。井筒は完掘し、検出面より170cmの深さ(標高1.3m)で底を確認した。井筒内下層の灰褐色砂埋土から大量の瓦が出土した。花卉文軒丸瓦の出土が特筆される。

出土遺物 (第11、12図)

ここに掲載する遺物はすべて井筒内から出土したものである。第11図16~20は土師器である。16、17は壺で前者が口径15.7cm、器高2.6cm、底径10.9cm、後者が口径14.8cm、器高3.1cm、底径11.4cmを測る。

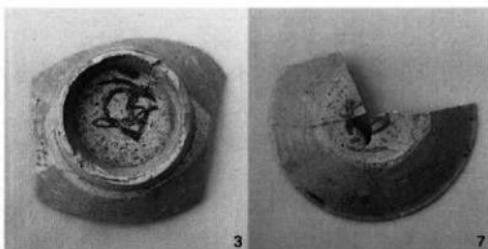
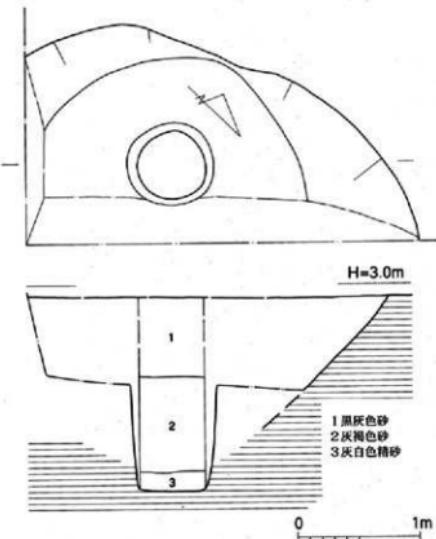
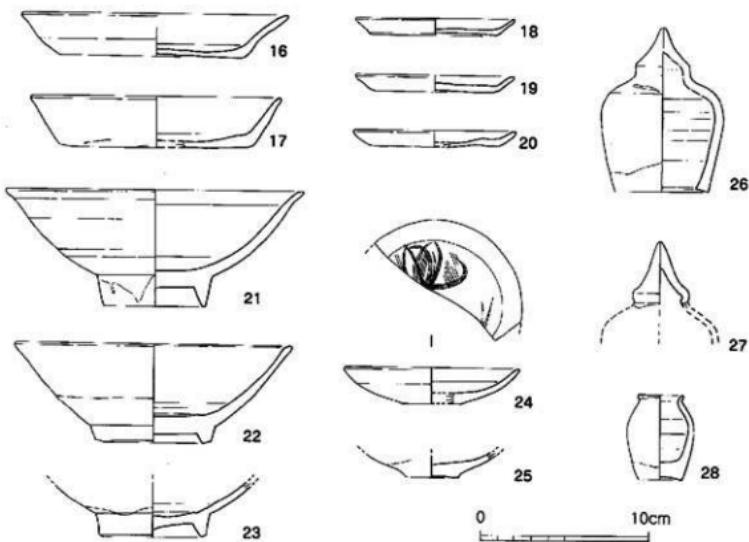


写真2 SE003出土器



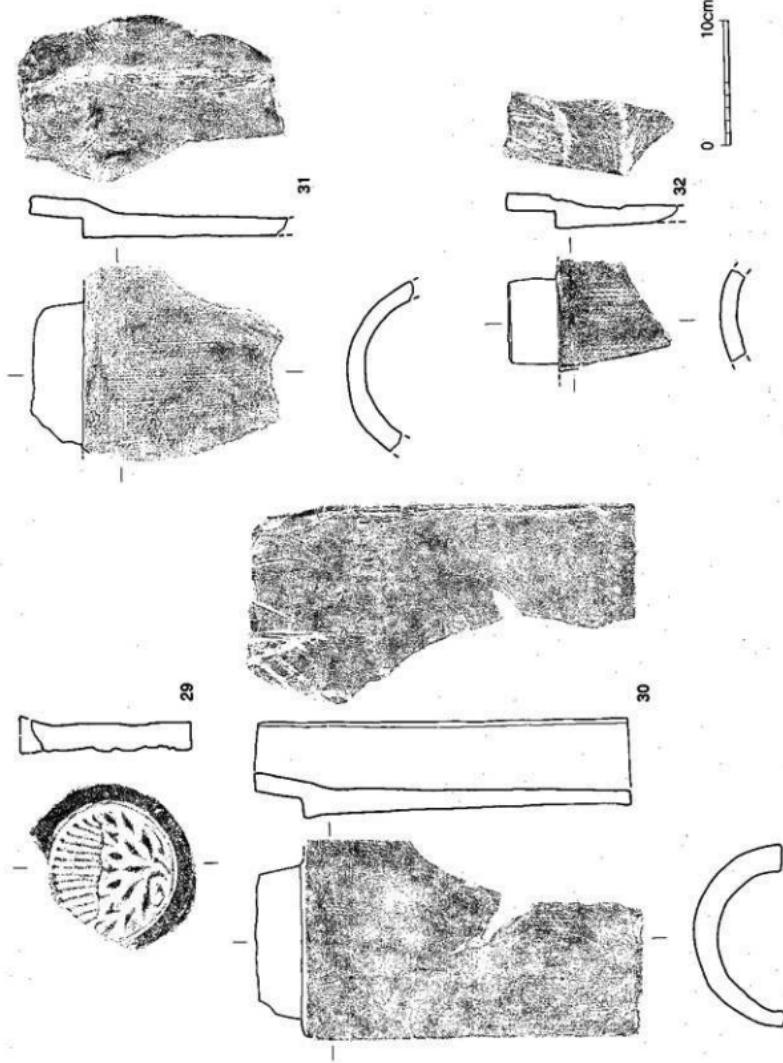
第10図 SE024実測図 (1/40)



第11図 SE024出土遺物実測図① (1/3)

底部糸切りで板目圧痕を有し、見込に轆轤ナデ後の指ナデが認められる。17は器厚が一定せず不恰好である。18~20は小皿である。いずれも底部糸切りで20は板目圧痕が見られる。法量は18が口径9.4cm、器高1.0cm、底径7.4cm、19が口径9.4cm、器高1.0cm、底径6.8cm、20が口径9.6cm、器高1.0cm、底径7.6cmを測る。21~25は白磁である。21は碗V-2a類で口径17.6cm、器高7.0cm、底径6.0cmを測る。口縁部は外反し内面に1条の曲線をもつ。釉は灰白色を呈し高台部は露胎である。22、23は見込を輪状に釉剥ぎする碗V-1類である。22は口径16.4cm、器高5.9cm、底径6.8cmを測り、高台は厚くて低く、口縁はまっすぐ伸びる。釉は灰白色で外面下半と底面は露胎である。24は皿VII-1c類である。体部中位の屈曲部の内面に沈線状の段を有し、見込にヘラと梯形花文を施す。口径10.4cm、器高2.2cm、底径3.4cmを測る。釉は灰白色を呈し、底部は露胎である。25は皿VI-1a類である。底部から体部外面下半にかけて露胎で浅黄色の釉をかける。26~28は灰釉陶器である。26は擬宝珠形をなし、仏具かあるいは蓋か。轆轤成形で外面の頂部付近にオリーブ釉をかける。肩から体部にかけては不透明の灰白色を呈し、釉がうまく溶けなかつたか、あるいは化粧土であろう。底部の切削面は焼成を受けており、この面は活きている。肩のやや上方には3ヶ所に砂目跡が付着している。光形品で器高9.8cm、体部の最大径7.2cm、底径5.6cmを測る。27も26とはほぼ同形の擬宝珠形製品の頂部である。28は壺形のミニチュア陶器である。口径2.7cm、器高5.1cmを測る。第12図29は花卉文軒丸瓦の瓦当である。花卉文瓦は宋商人との関連が指摘されている。30~32は丸瓦である。凸面は繩目叩き後ナデ、凹面には布目痕が残る。30は広端面から玉縁面まで残っており、長さ31.0cmを測る。以上の遺物からこの井戸は12世紀中頃~後半に位置付けられる。

第12圖 SE024出土遺物素描圖② (1/4)



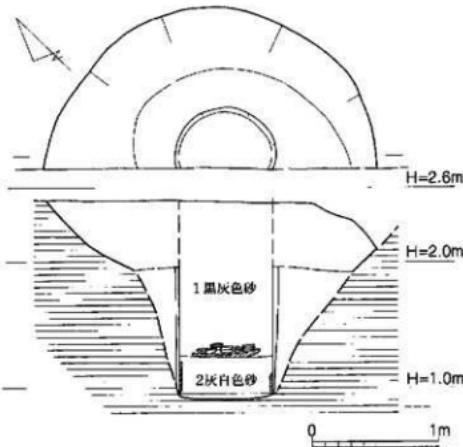
SE026 (第13図)

第2面で検出された井戸で、その半分が調査区内にかかっている。掘り方は検出面で径2.6m程度の円形に復元できる。調査区境界の矢板壁に接する部分を掘り下げねばならず非常に危険であるため、掘り方は50cm程度下げただけで完掘は断念した。井筒は完掘した。土層図に示すとおり、井筒底の第2層とした灰白色砂部分に桶の木質が残存していた。しかし、第2層埋土は井筒外側の土と同一であるので、ここは桶を押し込んだか、据えてすぐ埋まったかの状況を示しており、実際の底は第1層底面（標高1.2m）と考えてよいだろう。

第1層の底で炭化物の薄い層の上に上師器の小皿18枚と壺1枚が正置された状態で出土した。2、3枚重ねたものもあった。井「が」使用され始めた時点に行われた何らかの儀式に伴うものではないか。

出土遺物 (第14図)

33~35は土師器壺、36~55は土師器小皿である。すべて底部を回転糸切りするもので、半数ほどに板目圧痕が認められる。個別の法量を表1に示す。小皿は平均値で、口径8.3cm、器高1.6cm、底径6.1cmを測る。36、40、43、46、50の口縁部には一ヶ所に煤（灯芯痕）が付着しており、これらは灯明皿として



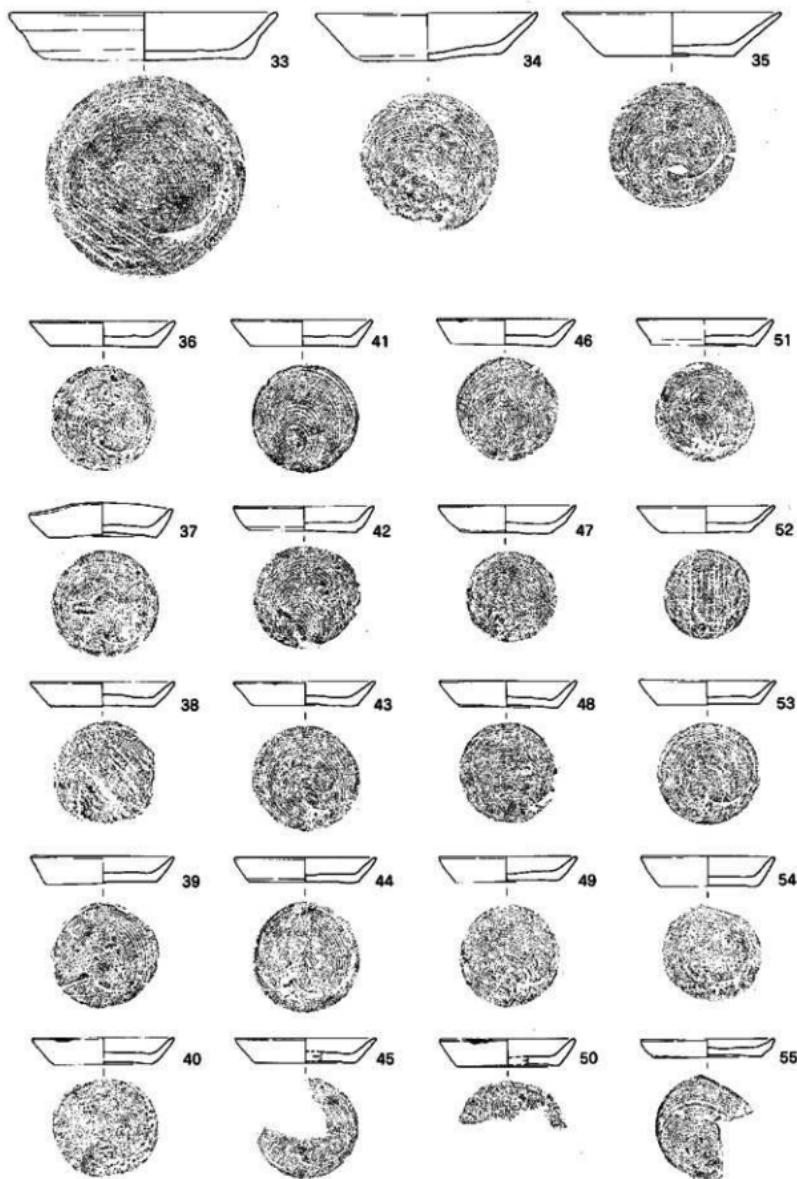
第13図 SE026実測図 (1/40)

表1 SE026出土土師器計測表

掘取番号	器種	口径	器高	底径	底部	板目圧痕	出土位置
33	壺	15.8	2.9	11.9	糸切り	○	
34	壺	13.2	2.9	8.7	糸切り	○	井筒底一括
35	壺	13.0	2.6	7.7	糸切り	○	
36	小皿	8.6	1.6	6.3	糸切り	○	井筒底一括
37	小皿	8.5	1.7	6.4	糸切り		井筒底一括
38	小皿	8.5	1.5	6.2	糸切り	○	井筒底一括
39	小皿	8.4	1.7	6.5	糸切り		井筒底一括
40	小皿	8.4	1.6	5.8	糸切り	○	井筒底一括
41	小皿	8.4	1.6	6.3	糸切り		
42	小皿	8.4	1.6	6.4	糸切り		
43	小皿	8.4	1.5	6.2	糸切り		井筒底一括
44	小皿	8.4	1.5	6.4	糸切り		井筒底一括
45	小皿	8.4	1.5	6.0	糸切り		井筒底一括
46	小皿	8.3	1.7	6.2	糸切り		井筒底一括
47	小皿	8.3	1.7	5.3	糸切り	○	井筒底一括
48	小皿	8.3	1.6	5.9	糸切り	○	井筒底一括
49	小皿	8.3	1.5	6.2	糸切り	○	井筒底一括
50	小皿	8.2	1.7	6.2	糸切り		井筒底一括
51	小皿	8.2	1.6	6.2	糸切り		井筒底一括
52	小皿	8.2	1.6	5.3	糸切り	○	井筒底一括
53	小皿	8.2	1.5	6.1	糸切り		井筒底一括
54	小皿	8.0	1.8	5.8	糸切り		井筒底一括
55	小皿	8.0	1.6	6.4	糸切り		井筒底一括

※法量の単位は cm

使用されたものである。前述のとおり、大部分が井筒底からの一括出土遺物であり、完形品が多い。出土遺物およびSE003との切り合いから13世紀に位置付けられる。



第14図 SE026出土遺物実測図 (1/3)

0 10cm

2) 溝 (SD)

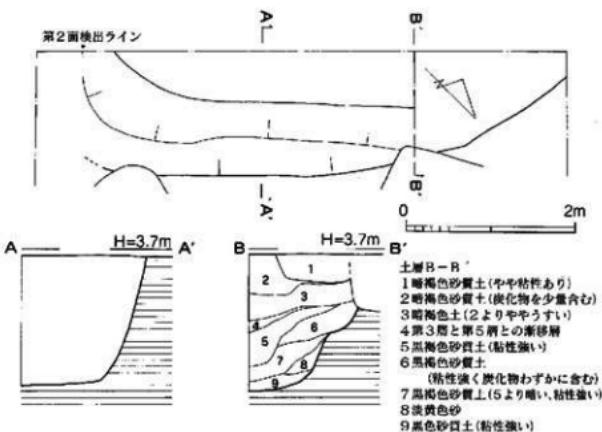
SD004 (15図)

第1面の調査区南西壁沿いで検出した溝である。東側の肩から底にかけて検出でき、対岸側は調査区外である。溝の両端は壁が出ており、西側の調査区外へ向きを変えるようである。深さ160cmを測る。第1～7層の各層の境に緑色の沈殿物が付着し、この部分は硬化している。水流によるものであろう。井戸と考えることも可能であろうが、井戸の掘り方にしては規模が大きいことと、土層中に水流に起因すると思われる沈殿物の硬化面が数面存在することから、溝と判断した。

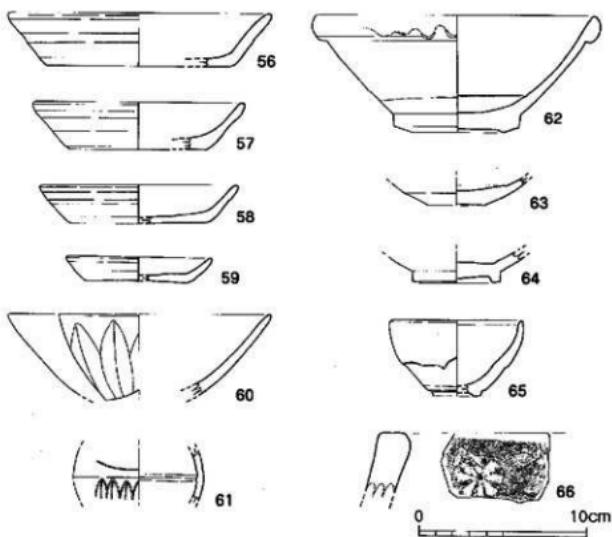
出土遺物 (第16図)

56～58は土師器壊である。いずれも糸切りで、外面に雜體ナテによる後線が數条認められる。59は土師器小皿で、底部は糸切り、口径8.7cm、器高1.5cm、底径6.1cmを測る。60、61は龍泉窯系青磁である。60は碗II類である。61は小壺であろう。外面の下半に蓮弁文を施し、内面の最大径部には継ぎ目と思われる線状の突起がめぐる。62～64は白磁である。62は碗IV-1a類で、口径17.0cm、器高7.0cm、底径7.4cmを測る。63は皿VII類である。

底部の釉は施釉後に削り取る。底面に墨書きする。「許□」か。64は碗で底面に墨書きがあり、「惜」か。



第15図 SD004実測図 (1/60)



第16図 SD004出土遺物実測図 (1/3)

65は天目茶碗である。胎土は褐色で、体部上半に黒釉が厚くかかる。66は瓦質土器の火鉢口縁部である。

SD021 (第17図)

第2面の調査区北寄りで検出した溝である。多くの遺構に切られて遺存状況はよくない。幅90cm、深さ20cmを測り、約2.4mにわたって検出した。

出土遺物

67~72は白磁である。67~69は碗V類である。高台は高く細く、口縁端部は嘴状に外に折れる。70は見込みの軸を輪状に搔き取る碗Ⅳ類。71は見込みの軸を輪状に搔き取る皿III-1類。72は皿VI-1a類である。73~75は土師器で、いずれも系切りである。76は瓦器柄である。内面に幅1.2mmのミガキを丁寧に施す。外面はナデ調整。口径15.6cm、器高4.7cm、底径6.2cmを測る。77、78は滑石製石鏡である。77は体部が外に開き口縁直下に鋒がある。

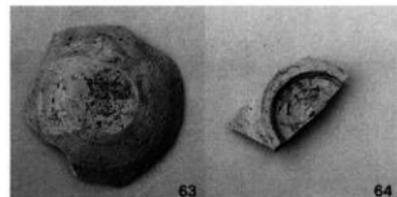
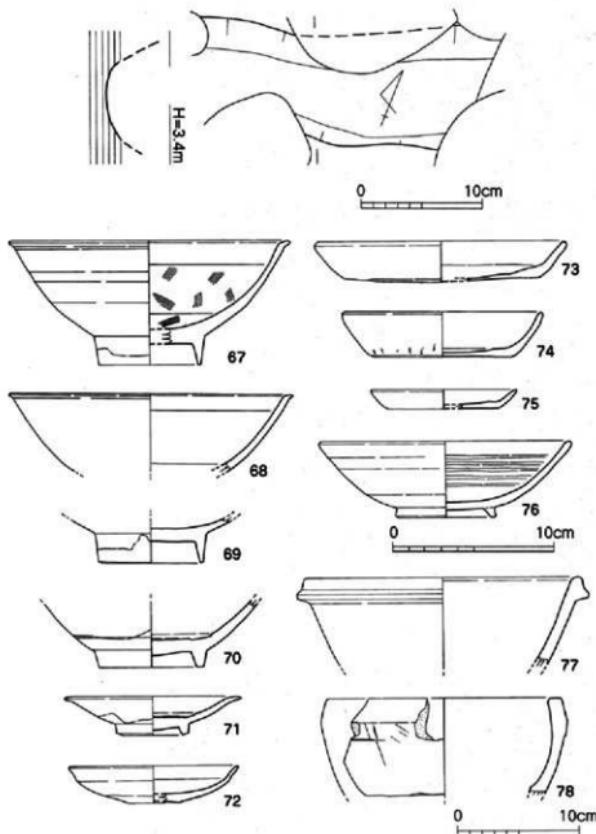


写真3 SD004出土器



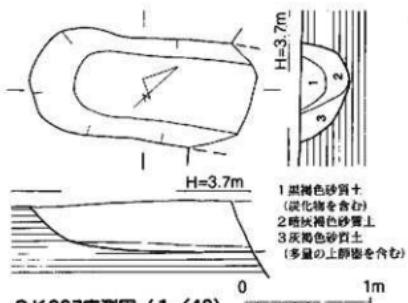
第17図 SD021および出土遺物実測図(1/40, 1/3, 1/4)

77, 78は1/4、他は1/3

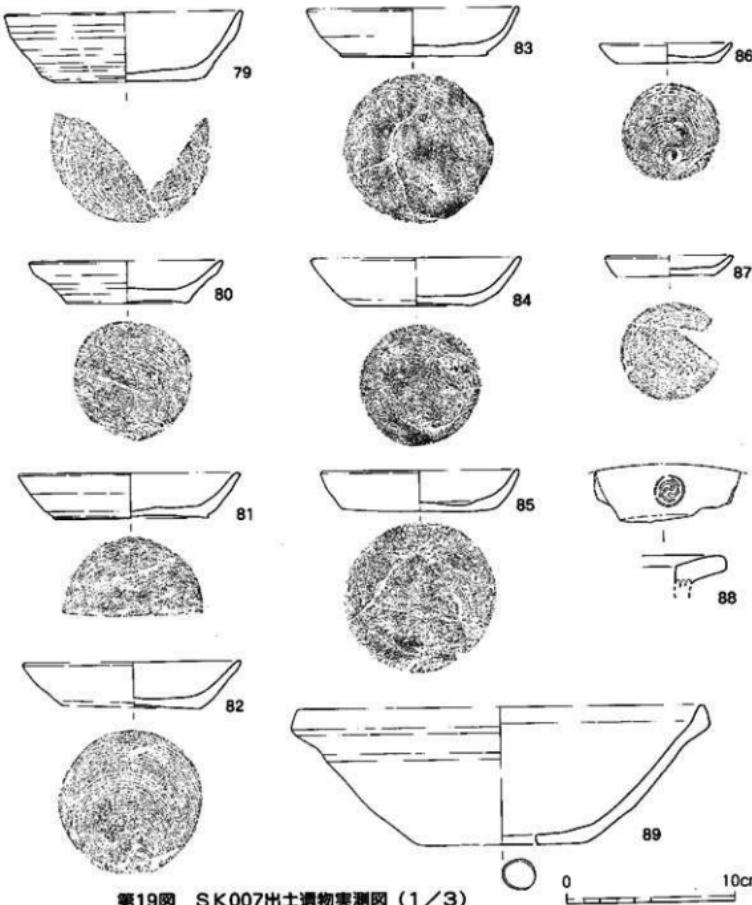
3) 土壙 (SK)

SK007 (第18図)

第1面で検出した。SE003を切るが、検出面では切り合いか不明瞭でSE003を先に掘ってしまった。長軸1.8m以上、短軸0.8m、深さ40cmの細長い土壙である。下層を中心に土師器の环・小皿がまとまって出土した。



第18図 SK007実測図 (1/40)



第19図 SK007出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第19図)

79~85は土師器坏、86、87は土師器小皿である。表2に法量を示す。すべて底部は回転糸切りである。79、80は外側に輶輪ナデによる後線が多く認められ、ほかの坏とは異なる。

88は土製火鉢の口縁部である。

口縁部は鉗状に折り、その上面

に巴文を印刻する。89は瓦質のこね鉢である。口径24.8cm、器高8.2cm、底径9.8cmを測り、内外面ともナデ調整を施す。口縁部は肥厚し断面三角形にちかい。焼成前に底部の中心からややすれた位置に径2cmの穴を穿孔している。

表2 SK007出土土師器計測表

測定番号	器種	口径	器高	底径	底部	板目圧痕
79	坏	14.0	4.1	9.3	糸切り	
80	坏	11.4	2.5	7.2	糸切り	○
81	坏	13.0	2.7	9.2	糸切り	○
82	坏	12.8	2.9	8.2	糸切り	
83	坏	12.6	2.9	8.8	糸切り	
84	坏	12.5	2.9	7.0	糸切り	
85	坏	11.8	2.5	9.1	糸切り	○
86	小皿	7.9	1.2	6.0	糸切り	
87	小皿	7.6	1.3	5.8	糸切り	○

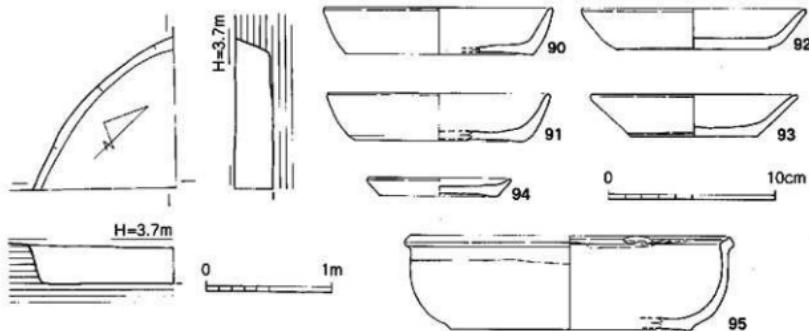
※法量の単位はcm

SK009 (第20図)

第1面の調査区東隅で検出した土壌で、約1/4が調査区内に入る。深さ30cmを測る。

出土遺物

90~93は土師器坏、94は土師器小皿である。すべて底部糸切りである。法量 (口径 - 器高 - 底径) は、90が13.6 - 2.8 - 11.1cm、91が13.2 - 2.8 - 10.0cm、92が13.4 - 2.5 - 9.2cm、93が12.4 - 2.5 - 7.5cm、94が8.6 - 1.1 - 7.0cmを測る。95は陶器の小盤I - 2a類である。復元口径19.6cm、器高5.6cm、底径14.4cmを測る。胎土は粗く、内面全体と口縁部外面に施釉する。外面には白い化粧土をかける。口縁端部の内側は無釉で白色粘土の目跡が残る。



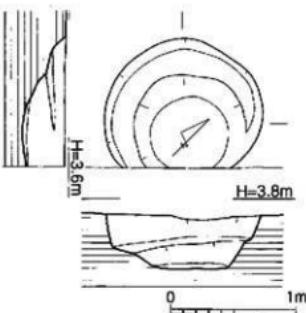
第20図 SK009および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

SK010 (第21図)

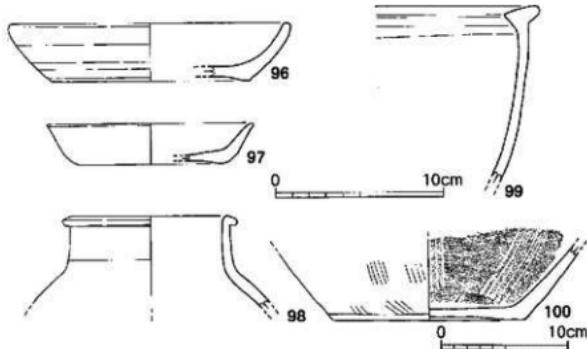
第1面の南東壁沿いで検出した。径1.3m程度を測る円形の土壌で、深さは45cmで2段掘りしている。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (第22図)

96、97は土器環である。96は大型品で口径16.8cm、器高3.5cm、底径10.8cmを測る。97は口径12.2cm、器高2.4cm、底径8.5cm。いずれも底部糸切りである。98~100は陶器である。98は耳壺である。頭部と肩の境が明瞭で口縁は外に折り返す。復元口径10.4cmを測る。99は盤口類である。口縁部はT字状を呈する。II縁部には白色の化粧土を付し、内面に黄灰色釉をかける。外面は赤く焼ける。100は擂鉢である。内面に擂臼、外面は刷毛目後ナデで調整する。



第21図 SK010実測図 (1/40)



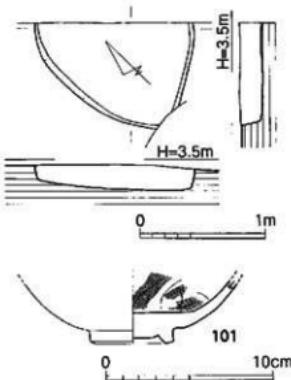
第22図 SK010出土遺物実測図 (1/3, 1/4) 100は1/4、他は1/3

SK011 (第23図)

第2面の北東壁沿い中央で検出した土壤で、調査区外へ延びる。深さ20cmを測る。

出土遺物

101は龍泉窯系青磁碗I - 3a類である。底部は厚く、内面に片影り文と櫛目を施す。高台内は露胎である。綠色釉をかける。



第23図 SK011および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

SK013 (第24図)

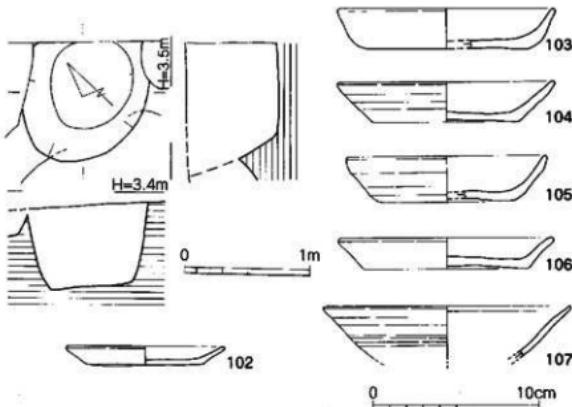
第2面の北東壁沿いで検出した円形の土壙である。埋土は黒褐色砂質上で検出面での径1.0~1.2mを測る。

SE003、024を切っている。

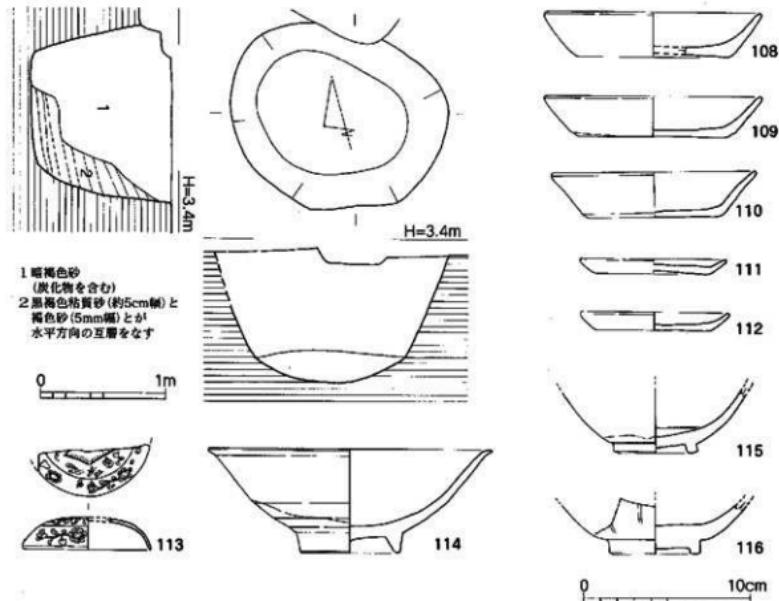
出土遺物

102は土師器小皿、103~106は土師器环である。すべて底部糸切りで102、104は板目圧痕を有する。法量

(口径 - 器高 - 底径) は、102が $9.4-1.2-6.8\text{cm}$ 、103が $13.0-2.4-9.4\text{cm}$ 、104が $13.0-2.4-8.8\text{cm}$ 、105が $12.0-2.8-8.2\text{cm}$ 、106が $12.9-1.9-9.9\text{cm}$ を測る。107は口禿げの白磁皿類である。復元口径 14.8cm を測り、灰白色釉をかける。出土遺物より13世紀後半~14世紀前半に位置付けられる。



第24図 SK013および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第25図 SK014および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

SKO14 (第25図)

第2面の調査区東隅で検出した楕円形の土壌である。検出面での径1.4~1.7m、深さ105cmを測る。両側の壁面から流れ落ちている下層埋土は褐色砂と黒褐色粘質土とが互層をなしている。

出土遺物

108~110は土師器环、111、112は土師器小皿である。すべて底部糸切りで112は板目圧痕を有する。法量(口径-器高-底径)は、108が13.0-2.7-9.0cm、109が13.0-2.4-9.0cm、110が12.2-2.7-7.8cm、111が8.8-0.9-6.7cm、112が8.9-1.1-6.9cmを測る。113は青白磁の合子蓋である。II径7.6cm、器高1.9cm。器壁は非常に薄く、外面に印花文を型押しする。114、115は白磁である。114は碗V-2a類である。口縁は端反り、高台は内側を斜めに削る。体部下半は露胎である。口径16.8cm、器高6.2cm、底径6.0cmを測る。115は小碗で底径5.0cmを測る。116は龍泉窯系青磁碗II類である。外面に蓮弁文を片彫りする。

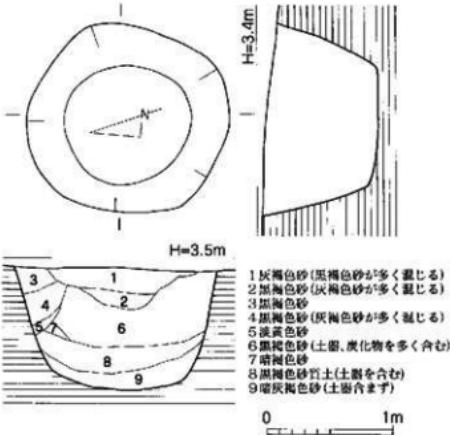
SKO16 (第26図)

第2面の調査区北寄りで検出した。検出面での径1.6m、深さ100cmの円形土壌である。ヘラ切りの土師器を含んでおり、本地区では少ない12世紀前半~中期の遺構である。

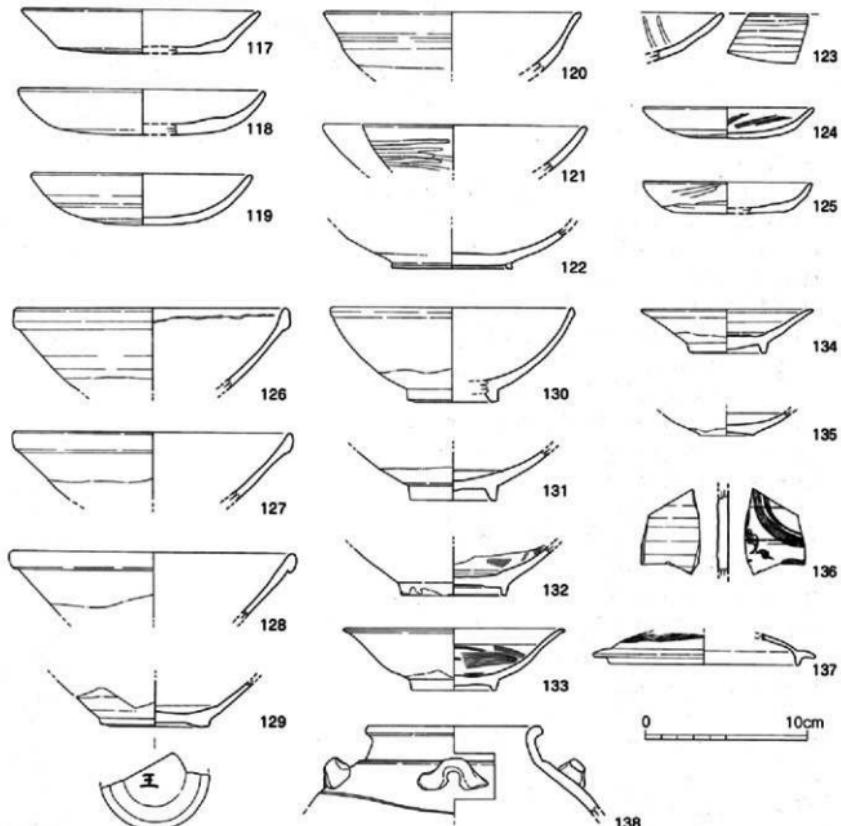
出土遺物 (第27図)

117~119は土師器环である。117は底部ヘラ切りで、口径14.4cm、器高2.7cm、底径10.0cmを測る。118は底部糸切りで、体部への立ち上がりは丸みを帯びる。口径15.0cm、器高2.8cm、底径9.6cmを測る。119は底部ヘラ切りで、底部を押し出し丸みをついている。内面は平滑にナデする。II径13.4cm、器高3.2cmを測る。120~123は瓦器輪、124、125は瓦器小皿である。

120、121、122は口縁部である。外面は太いミガキ、内面は平滑にナデ調整を施す。123は内面にも斜め方向のミガキを加える。122は底部で高台は断面四角形である。内面はミガキで平滑だが外面はでこぼこしている。124、125は底部は回転ヘラ切りで、内面は丁寧にナデしており平滑である。124は完形品でII径10.5cm、器高1.9cmを測り、丸底気味である。125は口径10.4cm、器高2.0cm、底径6.8cmを測る。外面も粗いミガキにより平滑に仕上げる。126~133は白磁碗である。126~129は碗IV類である。129は底に「王」と墨書きする。130は碗II-1類で口径15.0cm、器高5.8cm、底径5.6cmを測る。II縁は小さな玉縁である。131は碗II類で高台は外側が直立、内側が斜めに削られる。132は見込みがあり、体部内面に櫛目文を施す。133は碗VI-1b類で口径13.6cm、器高3.8cm、底径5.2cmを測る。器高が低く、内面に櫛目文を施す。口縁端部は外反し、高台は低い。134、135は白磁皿である。134は皿III-1類で見込みの釉を輪状に搔き取る。II径10.5cm、器高2.7cm、底径4.7cmを測り、外面下半は露胎である。底に「六」と墨書きする。135は皿VI類で黄白色釉をかける。136~138は陶器である。136は扁平な破片で外面に白化粧土を付し鉄絵を描く。137は蓋でかえりをもつ。



第26図 SKO16実測図(1/40)



第27図 SK016出土遺物実測図(1/3)

上面に黒褐色の鉄釉をかける。138は四耳壺である。口径10.9cmで頭部は短く肩との境に段をもつ。耳のすぐ下に波状の沈線を線刻する。ヘラ切りと糸切りの土師器が共存し、青磁が出土していないので、遺構の年代は12世紀前半～中頃と考えられる。

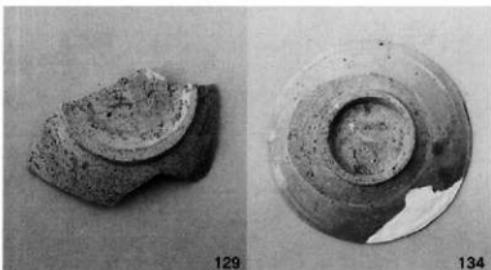


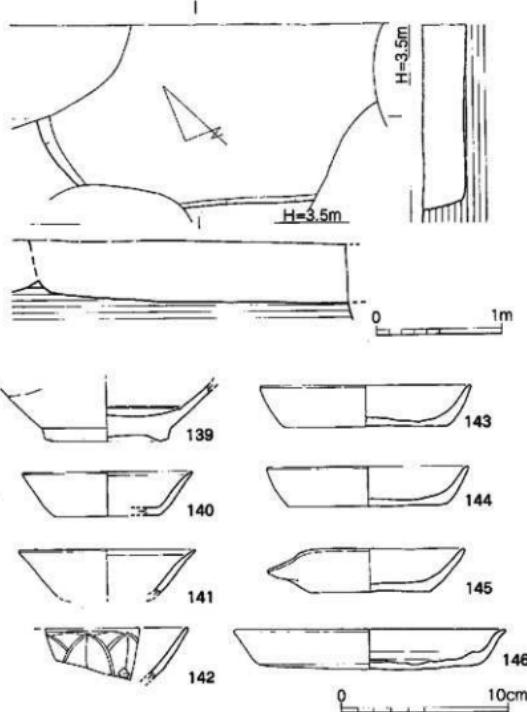
写真4 SK016出土墨書き器

SK019 (第28図)

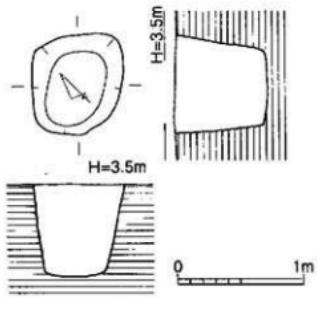
第2面の調査区北東壁沿いで検出した土壤で、調査区外へ延びる。遺構の切り合ひが激しく、平面形を明瞭に捉えることができないが、一辺が3mを超える大きな隅丸方形になりそうだ。深さは40cmで底面はほぼ平坦である。

出土遺物

139～141は白磁である。139は碗IV - 1a類である。高台は浅く削り出し、底径7.4cmを測る。140、141は口禿げの皿IX類である。142は龍泉系青磁碗II類である。外面に鎧蓮弁文を施し、釉オリーブ黄色を呈する。143～146は土師器壊である。143～145は底部糸切りで145は板目压痕が残る。法量は143が口径12.6cm、器高2.5cm、底径9.6cm、144が完形品で口径12.0cm、器高2.4cm、



第28図 SK019および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第29図 SK020および出土遺物実測図 (1/40, 1/3, 1/4)

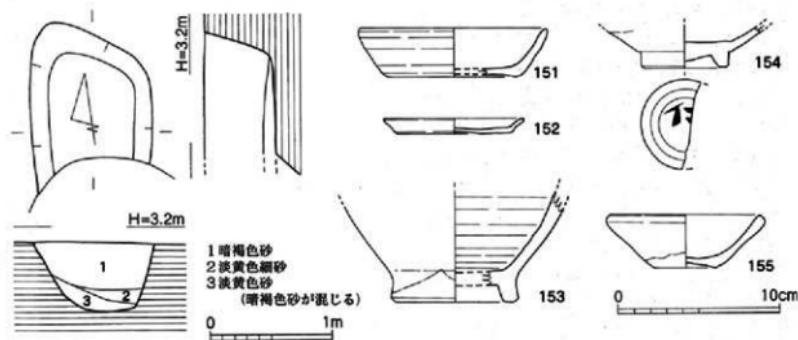
150は1/4、他は1/3

底径9.5cm、145が完形品で口径11.4cm、器高2.6cm、底径7.2cmを測る。145は口縁の1ヶ所が外に折れ曲がっている。146は底部ヘラ切りで板目圧痕が見られる。口径16.2cm、器高2.4cm、底径13.2cmを測る。このヘラ切り底の杯(146)は他の遺物と時期的に整合せず、混入したか取上げミスと考えられる。本来はこの遺構と切り合い関係にあるSKO16の遺物ではなかったか。出土遺物より、この遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

SKO20 (第29図)

第2面で検出した隅丸方形土壙で、径70～80cm、深さ70cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。
出土遺物

147～149は土師器である。147は杯で、口径12.5cm、器高2.7cm、底径8.7cmを測る。底部は糸切り。148、149は小皿でいずれも底部糸切りである。148が完形品で口径7.5cm、器高0.9cm、底径5.6cm、149が口径7.6cm、器高1.0cm、底径5.5cmを測る。150は瓦質攢鉢である。内面および外面の口縁直下に横ハケを施す。



第30図 SKO22および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

SKO22 (第30図)

第2面の調査区北寄りで検出した方形土壙で、南側はSKO27に切られる。残存長軸1.0m、短軸1.0m、深さ60cmを測る。

出土遺物

151は土師器杯である。器高が高く、口径11.6cm、器高3.0cm、底径7.8cmを測る。底部は糸切りで、外面に輪轂ナデによる稜が数条認められる。152は土師器小皿で口径8.6cm、器高0.9cm、底径7.0cmを測る。底部は糸切り。153は白磁の耳壺の底部である。底径7.8cmを測り、高台は断面四角形である。釉は灰白色で高台部分は露胎である。154は同安窯系青磁碗である。底部から体部外面下半にかけて露胎である。底に墨書きが見られる。「仁」か。155は褐釉陶器の皿である。口径9.8cm、器高3.3cm、底径3.8cmを測る。

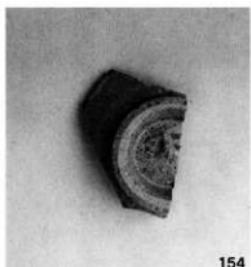


写真5 SKO22出土器物

SKO23 (第31図)

第2面の調査区北隅で検出した円形土壌でSKO16、O22に切られる。直径1m、深さ60cmを測る。埋土は黒褐色砂である。

出土遺物

156、157は土師器壊である。156は大型で浅く、底部は糸切りで板目压痕が残る。かなりひずむが、およそ口径16.0cm、器高2.8cm、底径11.8cmを測る。157は器高が高く底部糸切りである。口径10.4cm、器高3.2cm、底径7.8cmを測る。158は玉縁口縁の白磁碗IV類である。復元口径16.0cm。

SKO27 (第32図)

第2面の調査区中央で検出した円形土壌である。

直径1.5m、深さ95cmを測る。

出土遺物

159は白磁碗IV類である。160は白磁碗IV-2a類である。口縁端部は端反り、見込に1条の圓線をめぐらす。口径10.2cm、器高2.3cm、底径4.2cmを測る。釉は淡黄色を呈し、底部は露胎である。

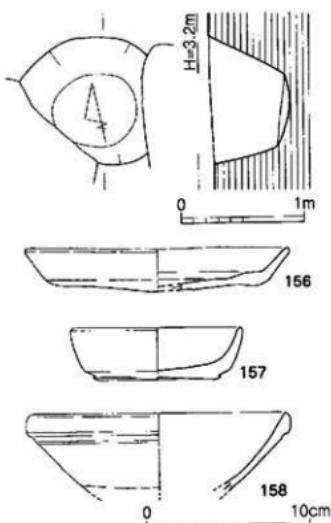
161は青磁碗である。高台は小さく器厚は薄い。見込に櫛描文を施し、外面は無文。受け付をのぞいて全面に灰オリーブ釉をかけるが、焼成不良でとくに内面の釉は白濁している。162は陶器で長胴の壺であろう。底部は非常に雑なへら切りで、いびつなうえにひびが数条入っている。そのため直立しない。底面をのぞいて全体にオリーブ黄色釉を施釉する。163は滑石製石鍋である。断面長方形の瘤状把手がつくタイプである。164、165は褐釉陶器である。164は四耳壺V類で最大径部はほぼ中央にあり、肩が明瞭でなく、胴部から口縁部までなだらかにそぼまつていく。底部は蛇の目高台状に浅く削り出す。肩に1条の横沈線があり、その下に波状沈線を入れる。外面に釉をかけるが、表面は胎土内の黒色粒が焼きはじめて粒々ができる。口縁部上面には白色土の目跡が残る。口径9.6cm、器高19.8cm、胴部最大径16.4cm、底径8.6cmを測る。165も耳壺V類である。底径8.2cmで高台を浅く削り出す。底面には4ヶ所に白色土目跡が残る。外面に黄褐色釉をかけており、筋状に釉が垂れている。内面にも一部釉がかかっている。

SKO28 (第33図)

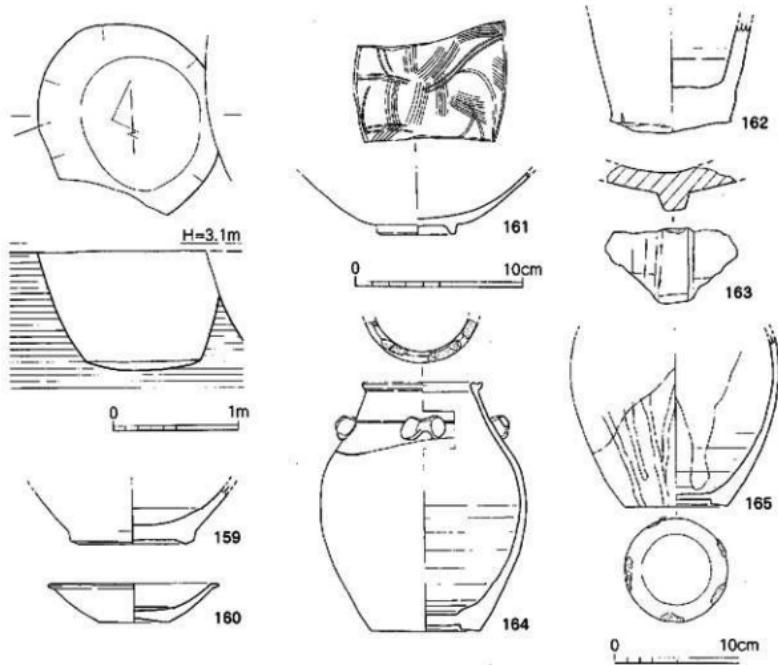
第2面の調査区南東壁にかかる土壌である。平面形は不明で、深さ30cmを測る。

出土遺物

166は白磁碗VI-1a類である。体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に段を有する。釉は灰黄色を呈し、外面下半は露胎である。口径10.2cm、器高2.7cm、底径2.6cmを測る。167は岡安窯系青磁で鉢か。口径25.0cm、残高7.1cmを測る。外面に櫛目文、内面にへらと櫛目で文様を施す。釉は黄褐色を呈する。見込部分を欠くが、見込周辺の一部に釉がかからない部分があるので、見込を輪状に搔き取っている可能性がある。

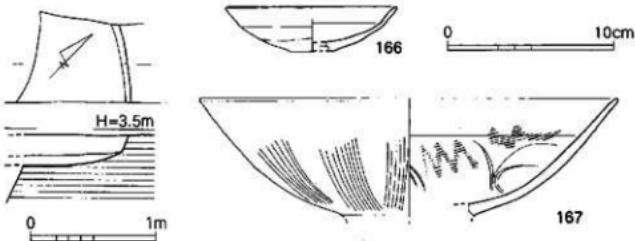


第31図 SKO23および出土物実測図
(1/40, 1/3)



第32図 SK027および出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)
164、165は1/4、他は1/3

SK029
(第34図)
第2面の調
査区南東壁に
かかる円形土
壇である。深
さ50cmを測
る。
出土遺物



第33図 SK028および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

168、169は白磁四III-1類である。いずれも見込の軸を輪状に抜き取り、外面下半は露胎である。
168は口縁端部を水平方向まで曲げており、口径10.2cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測る。169は
完形品で口径10.4cm、器高2.4cm、底径4.8cmを測る。170は白磁碗V-4b類である。口縁端部は

外に折れ、内面に梯文を施す。底部に墨書きしている。口径 17.2cm、器高 7.5cm、底径 6.4cm。軸は灰白色を呈し、高台部分は露胎である。

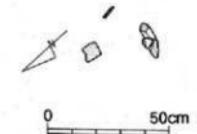


写真6 SK029出土黒土器

4) その他の遺構

SX031 (第35図)

第2面の調査区北隅で人骨が出土した。SK019の上に位置するが、周辺の土に判別できる違いはない、遺構の範囲はわからなかった。すぐ下に位置するSK019は、その大きさから見て、明らかにこの人骨が伴う墓ではない。人骨の遺存状態は非常に悪く、わずかに長管骨の骨体部片3つと骨盤と考えられる平らでスポンジ状の断面が見える骨片1つが出土ただけである。埋葬姿勢等の詳細は不明である。



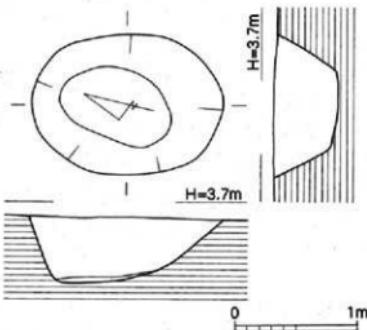
第35図 SX031実測図 (1/20)

SK006 (第36図)

第1面の調査区北隅で検出した土壤である。長軸 1.6m、短軸 1.2m の楕円形を呈し、深さは 50cm を測る。埋土は黒褐色砂質土である。人骨片が少量出土しており、土壌墓と考える。
出土遺物 (第37図)

171、172は土師器環、173は土師器小皿である。いずれも糸切りで、法量 (口径 - 器高 - 底径) は、171が 12.4 - 2.5 - 8.8cm、172が完形品で 12.0 - 2.4 - 8.5cm、173が 9.1 - 0.9 - 8.3cm を測る。174、175は白磁である。174はⅢ-V - 1b類である。175は口禿げの碗Ⅸ類。176は龍泉窯系青磁碗II - b類である。

177は同安窯系青磁碗である。



第36図 SK006実測図 (1/40)

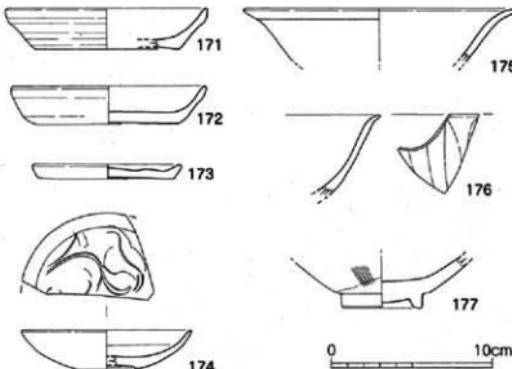
SX015 (第38図)

第1面の調査区南隅で検出した土壤で、調査区外へ延びる。深さ120cmを測る。途中に焼土層を3枚挟みながら、薄い層が幾重にも堆積する。何らかの焼成遺構である。

出土遺物 (第39図)

焼成面を手がかりとして分層して遺物を取り上げたが、土器群に明確な時期差は認められなかつた。178~181は土器器环である。すべて糸切り

で179は板目圧痕を有する。182~186は土器器小皿である。いずれも糸切り底で183、185、186は板目圧痕を有する。187~199は白磁碗である。187は碗VI-1a類。188、189は見込みの軸を輪状に搔き取る碗VII類である。190~193は玉縁口縁をもつ碗IV類である。193は底面に「六」と墨書する。194~199は碗V類である。196~199は内面に短い櫛目で花文を描く。200は青磁碗である。外面に継の櫛目、内面に櫛描きの文様を施す。201~206は白磁碗である。201~204は皿VI-1類である。201は底に砂が付着している。205、206は皿III類で、205は見込みの軸を輪状に搔き取る。206は見込み軸を搔き取っておらず、焼成時に最上段に重ねたものか。207は褐釉陶器の皿である。口径10.2cmを測る。出土遺物から、この遺構は11世紀後半から12世紀前半頃に位置づけられる。



第37図 SK006出土遺物実測図 (1/3)

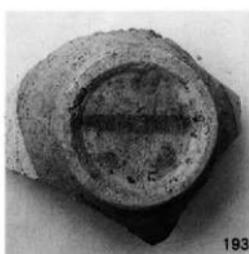
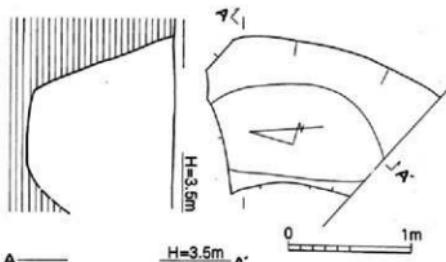
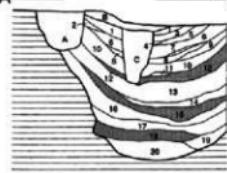
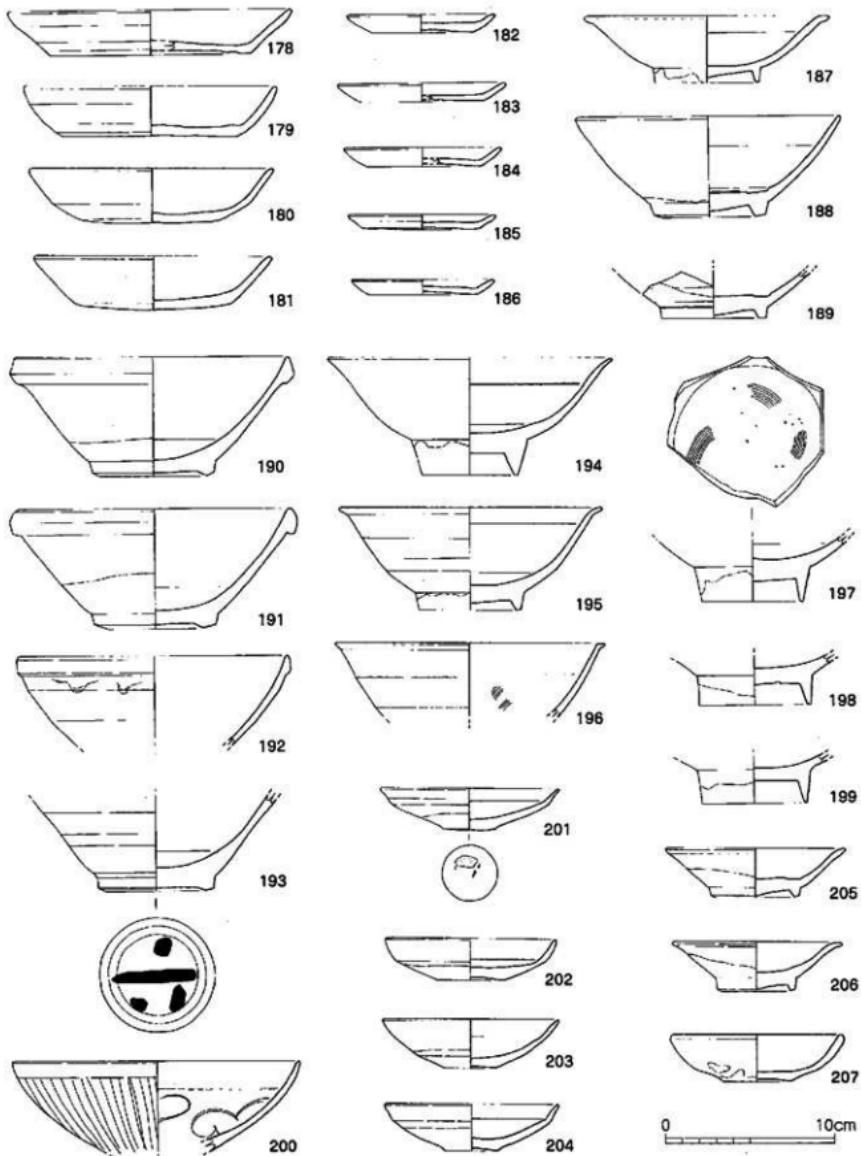


写真7 SX015出土墨書き器



A~C別のピット	7 うすい暗褐色砂	14 暗褐色砂 (黒色砂が多く混じる)
1 黒褐色砂(赤色粒混じる)	8 よこれた橙色砂	15 焼土
2 黄褐色砂	9 暗褐色砂	16 暗褐色砂 (灰黄色砂が少量混じる)
3 灰褐色砂	10 灰色砂と黒褐色砂が混じる	17 暗褐色砂
4 橙黄色砂	11 灰黄色砂	18 黑褐色砂 (焼土を含む)
5 第3層よりやや暗い	12 焼土	19 黑褐色砂
6 暗褐色砂	13 暗褐色砂	20 暗褐色砂

第38図 SX015実測図 (1/40)



第39図 SX015出土遺物実測図 (1/3)

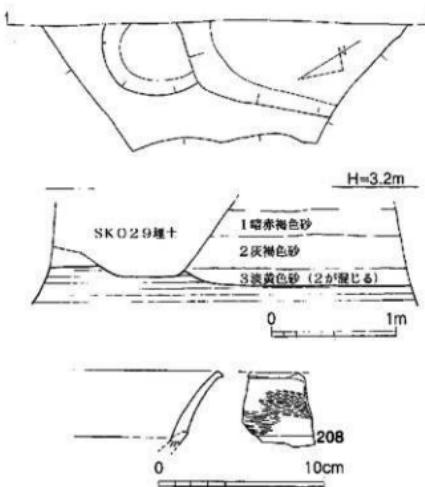
3. 弥生時代の遺構と遺物

SC030 (第40図)

調査区南東隅で弥生時代の堅穴住居址を検出した。中世の遺構群により大きく壊されており平面形はまったく不明である。ただ、調査区南東壁の七層では2.5mの長さで住居の埋土が確認できる。埋土は赤褐色（上層）および灰褐色（下層）の微砂で、土器はほとんど出土していない。

出土遺物

208は弥生中期の高坏である。外面は細かい横刷毛、内面はナデを施す。

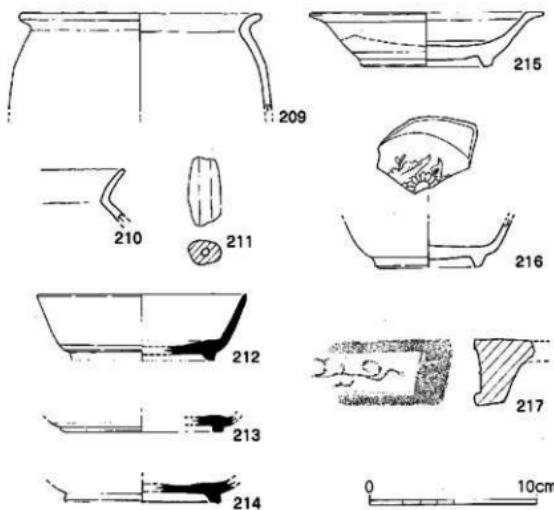


第40図 SC030および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

4. その他の遺物

包含層や遺構検出時に出土した遺物で、上述してきた遺構群の出土遺物と重複しないもののを中心に、いくつか図示する(第41図)。

209、210は弥生土器の甕である。211は土錘。212～214は須恵器の坏である。いずれも底部からの立ち上がりに近い位置に高台を有する。212は口径12.4cm、器高3.9cm、底径8.4cmを測る。215は白磁皿である。216は青磁碗である。見込に印花文を施す。217は軒平瓦である。



第41図 その他の出土遺物 (1/3)

第四章 結語

博多遺跡群第130次調査では、標高3.7mの第1面、標高3.4mの第2面の2面について調査を行った。調査の結果、12世紀から14世紀初頭にかけての井戸3基、溝2条、土塁20基、人骨が出土した埋葬関係遺構2基、複数の焼土面をもつ焼成造構1基、ピット35基を検出した。また、弥生時代中期の整穴住居跡1棟を検出したが、中世の遺構群により壊され遺存状況はよくない。遺構は検出できなかつたが、古代の須恵器も数点出土した。

出土遺物は中世の土師器、輸入陶磁器、瓦、瓦器を主として、ほかに弥生上器や須恵器等も出土した。遺物総量は発掘調査段階で大コンテナ箱26箱、整理・収蔵段階で小コンテナ47箱である。

本調査区は聖福寺正面のブロックに位置している。路地を挟んで北側の第62次調査区では、聖福寺総門と柳田神社とを結ぶ直線上で道路が検出されている。博多遺跡群を縦断するメインストリート（基幹道路）に対して支線道路と呼ばれているこの道路は、13世紀中頃につくられ、中世末の太閤町割りによる廃絶まで継続して使用されている。

本調査区では、調査面積42m²の範囲内に井戸3基がかかっており、その上、遺構密度が高く、多くの遺構が複雑に重なりあっていた。中世前期には聖福寺前の町屋としておおいに栄えていたのだろう。また、溝SD004は支線道路とほぼ直交する。当時の町筋と対応している可能性があるが、はたして周辺でも検出できるのか、今後の調査を待つかない。

出土遺物ではSEO24号井戸出土の花卉文軒丸瓦が注目される。花卉文瓦は、押波波状文軒平瓦とともに中国河南省、山西省あたりに起源をもつものと考えられている（佐藤一郎「宋代の陶磁と瓦の文様」『法哈壁2』1993年）。聖福寺が宋人百草勝に博多御首張国安の後ろ盾のもとに建立されたことを考えると、本調査区にも宋商人が住んでいたとしても不思議ではない。

墨書上器も9点出土しており、その中には「僧」と書かれたものが含まれている。また、SEO24号井戸からは陶器の擬宝珠形製品が2点出土した。類例を見つけることができず、いったい何なのか不明であるが仏具の可能性はないであろうか。聖福寺の門前という位置環境を考え合わせると、興味深い遺物である。



(1) 第1面全景（北西から）



(2) 第2面全景（北西から）

図版2



(1) SX015土層（北西から）



(2) SD004土層（南東から）



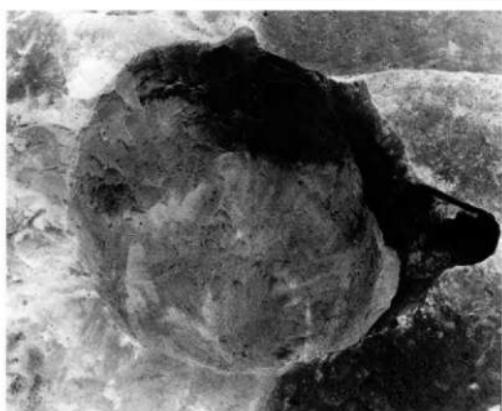
(3) SE026（北西から）



(1) SE003 (北から)

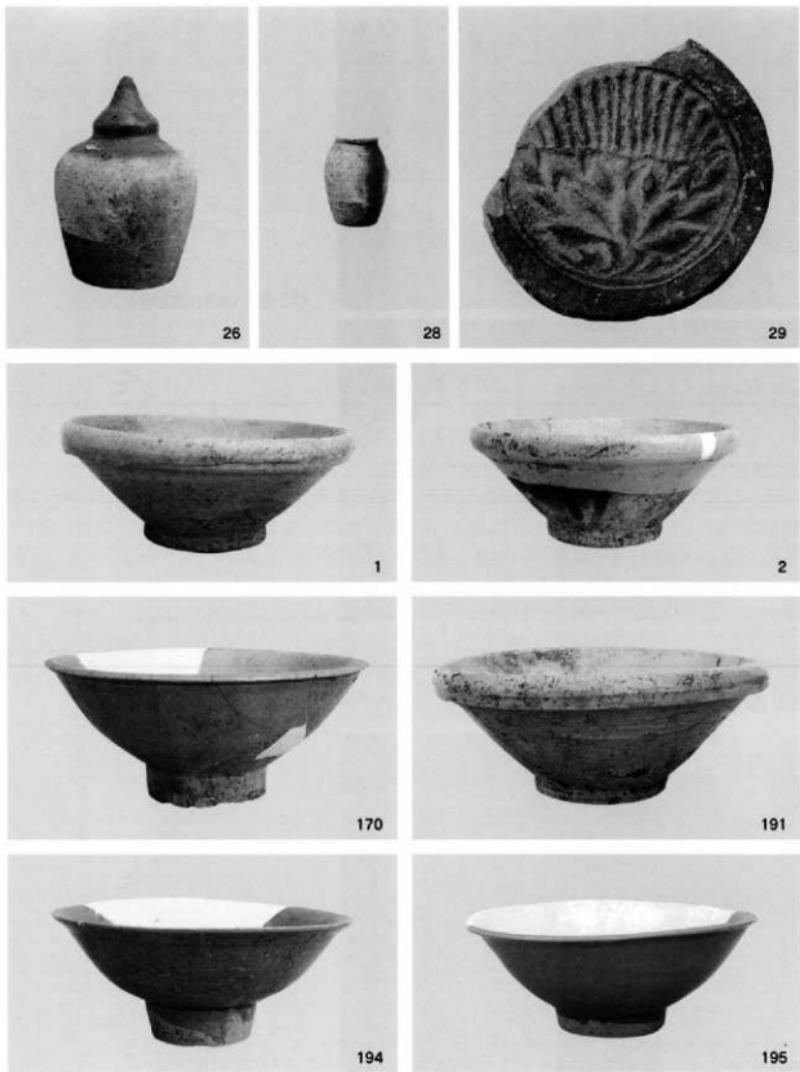


(2) SE024 (北西から)



(3) SK016 (西から)

図版4



出土遺物

博多91

—第130次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第762号

2003年(平成15)年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎ (092) 771-4667

印刷 セントラル印刷株式会社

福岡市中央区大宮1丁目5番13号

☎ (092) 522-3181